

《「矜持」を裏切る》粗雑な思考

——野村恭史に答える——

川崎 誠*

『図書新聞』2011.12.24付「ワイトゲンシュタインのテキストの、特異な「対応」づけ ウイトゲンシュタインの「矜持」を裏切ることになるのでは？」は、私の著書『言語哲学への新視角——ワイトゲンシュタインはソシュールを読んだ！——』の書評である——以下これを「書評」と呼ぶ——。否、論難である。筆者は野村恭史・北海道大学教員。粗雑な、余りに粗雑なその思考には啞然としたが、如何に粗雑とは言え、論難された側として沈黙を通すわけにはいかない。以下「書評」の順に随って応えよう。

(1) 野村曰く、《そのタイトル、とくにその副題にひかれて本書を読んだ。なんらかの新資料、あるいはあまり注目されてこなかったマイナーな遺稿等に基づく真摯な文献学的研究。(わたしのように) こうした内容を期待しつつ本書を手にとると、じっさいに書かれている事柄とのギャップにいささか面食らうことになる。》

苟も他人の著作を評しようというのである、当の著作の意図ぐらひは理解すべきであろう。自らの思い込みとそれゆえの曲解に基づいた論難ほど傍迷惑なものはない。《なんらかの新資料、あるいはあまり注目されてこなかったマイナーな遺稿等に基づく真摯な文献学的研究》が私の目指した

*専修大学経営学部教授

ところでないことは小著の「はじめに」(16頁)に明記した。だから、《(わたしのよう)に こうした内容を期待しつつ本書を手にとると、じっさいに書かれている事柄とのギャップにいささか面食らうことになる》と言われても、「お生憎様」と返すのみである。その上で次のことは言っておこう。「はじめに」——当然ながら小著の冒頭に配されている——の内容ですら、これを正確に捉えることのできない「書評」である。難解で知られるウイトゲンシュタイン等のテキストを、野村は読み解くことができるのか、甚だ疑問と言わざるをえない。

(2) 野村曰く、《本書の方法論は、控えめにいってもきわめて特異だ。ウイトゲンシュタインの或るテキストとソシュール(およびヘーゲル、マルクスなど)の或るテキストを、思想的文脈も伝統的文脈もほぼまったく考慮せずに、いきなり「対応」づけること。著者はこの方法論(というよりむしろその不在)のもとで、本書第4章から第7章にかけて、ウイトゲンシュタインの『哲学探究』や『草稿1914-1916』等の一部を、ヘーゲル『大論理学』、マルクス『資本論』、ソシュール『一般言語学講義』等の一部と(しばしばかなり強引な仕方)で「対応」づけている。

➤

「書評」の不思議の一つは、小著第1章から第3章、および補論に対する言及の皆無な点である。ソシュールとマルクスを主題にするそれらの諸章では、小著の採る方法が具体的に展開されている。《方法論(というよりむしろその不在)》と難ずる「書評」である、格好の標的を見出してもよさそうだが、野村は素通りするだけである。ソシュールやマルクスへの関心を「書評」が示すことは全くない。だが小著においてこの二人の思想家が果たす役割は重要である。そのソシュール等に無関心のままに——ことによると読んだことすらないままに——小著の書評を物するのは些か解

せぬやり方である。そこで率直に問うておこう。あなたはソシュール・マルクスを読んだのか。「読んだ」とは無論研究の水準においてである。知識の及ばぬことへの「論難」はあってはならぬから、これは学者的誠実への問いでもある。小著の《「対応」づけ》が《強引な仕方》としか見えないのは読手の力量の問題である。すなわち、ソシュール等のテキストの「意味」への無理解（読んだことがないのなら当たり前の話だが）、そして「論理」を把握する力の欠如、これである。後者について続けて説く。

(3) 野村曰く、《一例を挙げよう。前期ウイトゲンシュタインの主著『論理哲学論考』冒頭の有名な一文「Die Welt ist alles, was der Fall ist」を著者はきわめて変則的に「世界はすべてである、すなわち当の場合であることである」と訳した上で、これにヘーゲル『大論理学』本質論の一節を「対応」づけ、次のように解釈している。《『大論理学』に準えて、「世界は形式的である」。というのは、「当の場合であること」は「当の場合でないこと」でなく、すると「現実性」がそうであるように、世界もまた「形式の総体性としてあるのではないその限りで」の世界だからである。それゆえ「すべてである」そのことにおいて、世界は「最初の世界として直接的な・反省していない世界にすぎず・それだからこの形式規定のうちにのみある」(280頁)。／細部についての詮索はすべて措かざるをえないが、この「読解」で特徴的なのは、ウイトゲンシュタインのテキストの意味内容を、それに「対応」づけられたヘーゲルのことばで説明し去っている点である。》

「書評」が伝えようとしない小著の叙述スタイルは基本的に次である。初めにウイトゲンシュタインのテキスト（この場合『論考』）全文を掲げ、次いで対比するテキスト（同じく『大論理学』）の全文を載せる。そしていずれのテキストについても、初出の際はほぼすべてに原文を付してある。

これは専ら研究者向けの小著において、読者は当然に原文を参照すると考えてのことである。そこで「書評」の引用する280頁は、概ね次の体裁である。

1 世界はすべてである，すなわち当の場合であることである。Die Welt ist alles, was der Fall ist.

この叙述には、『大論理学』本質論現実性編「第2章現実性」の「A偶然性または形式的現実性・可能性・および必然性」1パラグラフ第1文が対応する。

＜大＞ 現実性は、最初の現実性として直接的な・反省してない現実性にすぎず・それだからこの形式規定のうちのみみあるが、しかし形式の総体性としてあるのではないその限りでは、形式的である。Die Wirklichkeit ist formell, insofern sie als erste Wirklichkeit nur *unmittelbare, unreflektierte* Wirklichkeit, somit nur in dieser Formbestimmung, aber nicht als Totalität der Form ist.

小著の訳文が《きわめて変則的》とのことだが、原書の語順に忠実に訳したまでである。また「was der Fall ist」の先行諸訳が一様ということもない。とりわけ「成立していることがら」（坂井秀寿）・「実情であることがら」（奥雅博）なる訳と「その場に起こること」（山元一郎）なる訳との間には無視しえない差異が認められる。拙訳はその点を考慮したものだが、それを《変則的》としか言えないのは特定邦訳だけに眼を向けるからであろう。

原書に忠実であれば、「Die Welt ist alles」が『大論理学』の冒頭文「Die

Wirklichkeit ist formell」と対比されよう。だから《『大論理学』に準えて、「世界は形式的である」》としたのである。つまり独文において「Die Welt ist alles, was der Fall ist.」と「Die Wirklichkeit ist formell, insofern sie als ist.」とを並べ、二つの文に構文上の対応を見た。後者に準えて前者を書き換えれば、「世界は、ことが当の場合であるその限りでは、そのすべてである」となるからである。これに対し両者に何の対応もないと言うなら、むしろ相当鈍な感覚である。

ともあれ小著は当の構文の論理を次のように読んだ。「当の場合であること」は「当の場合でないこと」ではない（野村に尋ねよう、これは誤りか）。すると「世界」とは、「世界」とは言い条、「形式の総体性としてあるのではないその限りで」の「世界」である（これは誤りか）。その「世界」がしかし「すべてである」と謂うのだから、かく言われる「世界」とは、「最初の世界として直接的な・反省していない世界にすぎず・それだからこの形式規定のうちにのみある」ところの「世界」である（これは誤りか）。『大論理学』が「現実性」について「この〔現実性という〕形式規定のうちにのみある」と説くと同様に、『論考』は「世界」について「この〔当の場合であるという〕形式規定のうちにのみある」と説く。至極当然の論理展開であり、だからこそ『論考』の以降の叙述につながる（後述）。かかる論理の把握が、しかし《ウイトゲンシュタインのテキストの意味内容を、それに「対応」づけられたヘーゲルのことばで説明し去っている》として斥けられるなら、《ウイトゲンシュタインのテキスト》に論理を見出すことはおよそ不可能であるだろう。《細部についての詮索を措く》というの、細部を理解できないことの口実にも聞こえる——「書評」に所謂《ヘーゲルのことば》は、むしろ「ヘーゲルの論理」であるべきだと私は考えている。なるほど論理は言葉でもあろうが、後述する野村の論理的混乱を思うとき、「ヘーゲルの論理」を捉えた上での《ヘーゲルのことば》であるのかと疑いたくなるのである——。

(4) 野村曰く、≪[ワイトゲンシュタインのテキストの意味内容を、それに「対応」づけられたヘーゲルのことばで説明し去る] ここには大きな問題がある。著者は、二つのテキストがもともと属していた思想的文脈の差異をほぼ完全に無視している。いいかえれば、ワイトゲンシュタインのテキストを、それがもともと属していた文脈から完全に引き剥がして、ヘーゲル『大論理学』の文脈になんの媒介もなく端的に接ぎ木している。「対応」づけられるテキストがマルクスやソシュールのもになるだけで、他の箇所でも基本的に同じ仕方ですワイトゲンシュタイン「読解」がおこなわれている。≫

テキストの読解において野村は≪文脈≫を重視するつもりらしい。だが「つもり」は「実際」ではない。果たして野村はワイトゲンシュタイン読解に際して≪文脈≫を重んずる読手であるか、「書評」を読む限りは相当に怪しい。次は小著にも引用した『哲学探究』の一節である（無用の論難を避けるべく、以下本稿での引用は大修館版の訳文を借用する）。

234 しかし、われわれはまた、ふだんやるように（みんなが一致する等）計算しながら、なおその各段階で、魔力に導かれているかのように規則に導かれているという感じをもち、おそらくは自分たちが一致することに驚く、といったしかたで計算することができないだろうか。（神にそうした一致を感謝しながら。）

要点は「驚く」ほどの「一致」にある。しかもその「驚き」は「神に感謝する」までに深い。「魔力に導かれているかのような一致」とは人知を超えて見出されよう。では≪思想的文脈≫はどうであるか。これをも「われわれ」は「驚き」とともに手にするか。そうではあるまい。≪二つのテキストがもともと属していた思想的文脈≫と言うからには、≪思想的文脈≫

やそれらの《差異》が「魔力に導かれているかのように」知られることはない。《もともと》と謂われるほどに、それは人知のうちに納まっている。だから野村の促しに従えばテキストの読みは「驚き」と無縁である。「驚き」を説く《ワイトゲンシュタインのテキスト》を、「驚き」を欠いたままに・すなわち《ワイトゲンシュタイン『哲学探究』の文脈になんの媒介もなく端的に接ぎ木して》、読む。《文脈》強調の実態はこれである。

それだけではない。《テキストがもともと属していた思想的文脈》を謂うとき、学はその始元をもちえない。言うまでもなく、学の始元は「驚き」とともにある。だから234節は学の始元に関わる叙述である。「魔力に導かれているかのような一致」とは、それが市場における需給の一致を想起させるように、「われわれ」にとっての偶然である。これに対して《テキストがもともと属していた思想的文脈》は偶然に見出されるのではない。そしてワイトゲンシュタインがここで偶然を説くのは、始元をそこに見るべき絶対的なもの（絶対知）が、偶性個別者の実体指示を通してのみ「われわれ」に開示されるからである——すなわち *ὁποκείμενον* (suppositio) であり、ここで偶性個別者は属性一般者に規制されている。ワイトゲンシュタインがなぜ終始一貫「命題の一般的形式 die allgemeine Form des Satzes」を探究したか、野村は考えたことがあるのだろうか。さらに言えば、それと「資本の一般的定式 die allgemeine Formel des Kapitals」との親近を——。他方《もともと属していた思想的文脈》においてテキストは他に媒介されたままに留まる（相対知）。《思想的文脈》に囚われている限り、始元を巡る『探究』の思索は理解されない。小著の表明したテキスト「対応」の「驚き」を《端的な接ぎ木》と見ることに、その無理解は端的に現われている。

(5) 野村曰く、《これ [小著の読み] が適切な「読解」たりうるのは、ワイトゲンシュタインが自らのテキストを自覚的に（ヘーゲルなら）へ

ヘーゲルについてのものとして書き上げた場合、つまりかれがその主著の一部でヘーゲルなりマルクスなりの思想をたんに辿り直していった場合のみであろう。とはいえこうした物言いすらも、本書への批判とはならない。著者がじっさいそう主張しているのだから。著者によれば、「ウィトゲンシュタインは『探究』を〔ソシュールの〕『講義』の叙述と対応させて書いた」のだし（11頁）、「『探究』序言に謂う思索の「自然の傾向」とは、〔ヘーゲル論理学の〕有論から概念論に至る論理の展開だ」という（143頁）。のみならず、「ウィトゲンシュタインはその哲学活動の最初期から、すでにヘーゲル論理学を自家菜籠中のものとし、思想を紡いでいった」のだし（143頁）、「『草稿』後半部は〔ソシュールの〕『講義』〔を読むかたわらでつけられた〕ノートという性格をもつ」（171頁）、云々。／ここから、本書にいう「対応」が次のような内実をもつことがわかる。「ウィトゲンシュタインのテキストWが（ヘーゲルやマルクスやソシュールの）テキストXと対応する」のは「ウィトゲンシュタインがXを下敷きにして・忠実にそれをなぞる形でWを書いた」ときそのときにかぎる。≫

まず、《ウィトゲンシュタインが自らのテキストを自覚的に（ヘーゲルなら）ヘーゲルについてのものとして書き上げた場合、つまりかれがその主著の一部でヘーゲルなりマルクスなりの思想をたんに辿り直していった》と《著者〔川崎〕がじっさいそう主張している》というのは嘘である。断片を重ねることで如何にも小著からの忠実な引用であるかを装うが、上にも触れた「はじめに」（16頁）の明記を「書評」はまったく無視している。そこでは次のように述べた。

ただし「ウィトゲンシュタインはソシュールを読んだ」という主張が、何らか証拠に基づくのかとあくまで問われるならば、私にもそれ

はない。むしろ証拠なくしてそのように主張することこそ、ウイトゲンシュタインには相応しいと考える。「ウイトゲンシュタインはソシユールを読んだ!」「!」は私の驚きの表現なのである。

一書としてのまとまりをもつ著作において、「はじめに」なされた態度表明が後続諸章にも妥当するのはむしろ当然である。そうであれば「ウイトゲンシュタインは『探究』を『講義』の叙述と対応させて書いた」等も、テキスト間に見出される「論理に基づいての深い結びつき」を見出した私の「驚き」の表現である。しかも小著は次の叙述をも含んでいる。

ウイトゲンシュタインが時枝を、あるいは森重がウイトゲンシュタインを、直接読んでいないことを理由に、それぞれの間の思想的連関を見ようとししないなら、それは学的態度ではあるまい。優れた思想の相互に何らか論理的な関わりが認められる以上、思想家自身の意識とは別にそれを明らかにするのは学の務めだからである。このことは無論、ウイトゲンシュタインとソシユールおよびヘーゲルとの関係においても同断である。前者が後者の諸著作を「読んだ」か否かという歴史的な逸話は、ウイトゲンシュタイン哲学を理解する一助になりうるにしても、それが研究の本筋に位置することはない。(「おわりに」293頁)

ウイトゲンシュタインがソシユール等を「読んだ」か否かを「歴史的な逸話」にすぎないとみなす立場が、《「ウイトゲンシュタインのテキストWが(ヘーゲルやマルクスやソシユールの)テキストXと対応する」のは「ウイトゲンシュタインがXを下敷きにして・忠実にそれをなぞる形でWを書いた」》などという《内実》をもちえようか。小著が強調したのはテキスト間の論理的な対応であり、それは私自身の解釈である。この

点を無視し、ウイトゲンシュタインがヘーゲルを「なぞった」という「歴史的事実」を小著が主張しているかのように「紹介する」。これがためにする曲解でなくて何であろう。

しかも小著が「証拠なくして主張する」のは、『哲学探究』の次の一節に「証拠」の無力を読むからである。

185 …… (前略)……いま、生徒に1000以上のある数列 (たとえば「+ 2」)を書きつづけさせる、——すると、かれは1000, 1004, 1008, 1012と書く。

われわれはかれに言う、「よく見てごらん、何をやっているんだ！」——かれにはわれわれが理解できない。われわれは言う、「つまり、君は2をたしていかなきゃいけなかったんだ。よく見てごらん、どこからこの数列をはじめたのか！」——かれは答える、「ええ！でもこれでいいんじゃないのですか。ぼくはこうしろと言われたように思ったんです。」——あるいは、かれが数列を示しながら、「でもぼくは [これまで] 同じようにやってきているんです！」と言った、と仮定せよ。——このとき、「でもきみは……がわからないのか」と言い——かれに以前の説明や例をくりかえしても、何の役にも立たないだろう。——われわれは、そのような場合に、ひょっとするとこう言うかも知れない。この人間は、ごく自然に、あの命令を、われわれの説明にもとづいて、ちょうど「1000までは常に2を、2000までは4を、3000までは6を、というふうに加えていけ」という命令をわれわれが理解するように、理解しているのだ、と。…… (後略) ……

ここで「よく見てごらん」とは、「この数列」が《もともと属していた文脈》を「見てごらん」ということである。学校教師であれば「間抜け」とも言って済ませるかもしれない。しかし哲学者は一件落着としない。「(文

脈を)見る schauen」が表象作用(後述)であり、その不足を知っているからである——不足を知る者は、《文献学的研究》がたとい《真摯》になされようと、哲学としては不足であることをも知っているはずである——。

さて、それにしても、である。小著がテキスト間に「論理に基づいての深い結びつき」を見出したことを以て、《「ウィトゲンシュタインがXを下敷きにして・忠実にそれをなぞる形でWを書いた」》ことになると結論づける。何とも浅薄な論理観ではないか。かかる論理観の持主であれば、なるほどテキスト間の論理的対応は把握できまい。また最初期より「論理的なもの」に留目していたウィトゲンシュタインとは、縁もゆかりもないだろう。

本来の命題はいずれも、それが語ることに加えて、世界について何かを示している。何故ならば、その命題が意義を持たねば使用されえないし、意義を持てば世界の何らかの論理的性質を反映しているからである。(「ノルウェーで G.E.ムーアに対して後述されたノート」108i)

(6) 野村曰く、《こうした「読解」は、或る重要な意味でウィトゲンシュタイン自身の矜持とでもいうべきものを裏切ることになるのではないだろうか。『探究』序文にこうある。「もしわたしの書きものが、それをわたしのものとして特徴づけるいかなる印をも帯びていないとしたら、わたしはそれをなお自分の所有物だと主張しようとは思わない」。ここから推し量られるかれの矜持とは、自分が書き残したテキストのオリジナリティへのそれである。この観点からすると、本書のウィトゲンシュタイン「読解」には疑問を感じざるをえない。こうした矜持の持ち主が、最大限の思い入れのあるテキストでたんに他人の思想を反復していたとはどうしても考えられない。》

第一。上に述べたごとく、《こうした「読解」》は小著のそれとは無縁であり、あくまで野村の曲解にすぎない。

第二。《こうした矜持の持ち主が、最大限の思い入れのあるテキストでたんに他人の思想を反復していたとはどうしても考えられない》、私も同感である。ただしウイトゲンシュタインが《たんに他人の思想を反復していた》というのは、曲解に基づく創造物にすぎない。

第三。ウイトゲンシュタインの《オリジナリテイ》と謂うなら、『論考』の説く「論理的構文論」もその一であろう。というのは、ウイトゲンシュタインの《書きもの》は、「論理的構文論」においてこそ最も《ウイトゲンシュタインのものとして特徴づけ》られて読まれようからである。

3-33 論理的構文論においては記号の意味はいかなる役割も演じてはならない。論理的構文論は記号の意味を論じることなく提起されるものでなければならない。諸表現の記述を前提することだけが許されているのである。

「構文論」にも種々がある。言語学であれば、例えば「展叙」「統叙」「陳述」等について記述される（渡辺実『国語構文論』）。けれどもウイトゲンシュタインが説くのは論理的な「構文論」である。構文の論理的な理解の不可欠なることは無論である。小著において諸テキスト各構文の論理を探るのは、それゆえ「論理的構文論」の実践である——他方野村は、《ウイトゲンシュタインのテキストの意味内容》に「役割を演じさせる」つもりのようなのだ。（3）に引いた「書評」——。

このことは先に触れた『論考』冒頭の読みがその具体例である。『大論理学』の「現実性」がそうであるように、「das, was der Fall ist」も「形式的現実性」であった。『論考』で直後に「事実 Tat-sache」に言及するのは、その形式的現実性たる「das, was der Fall ist」が「主観的行為 das sub-

jektive Tun」(岩波版『大論理学』上の一 p. 58)・「普通に恣意と見られるような決意 der Entschluß, den man auch für eine Willkür ansehen kann」(同 p. 61) だからである——Tat: das, was getan worden ist; Willkür←Willenswahl——。そして「形式的現実性」であるからこそ、それは後に「実在的現実性」たる「思想 Gedanke」として捉え返される。さらに「普通に恣意と見られるような決意」は言語活動において例えば類推的創造として現われるが、そうした「試み essai」の基礎に記号の恣意性の存することは言うまでもない。このように、《ウイトゲンシュタインのテキスト》に「論理的なもの」を見出すことは、当のテキストの豊穡を知ることである。このことが何故に《矜持とでもいうべきオリジナリティを裏切ることになる》のか。真逆である。《矜持を裏切る》と言うなら浅い読みこそそれである。「論理的なもの」を把握しえないそうした読みは、《ウイトゲンシュタインのテキスト》を我が身に似せて貧弱なものに貶めるだけである。

そこで仮に、である。仮にウイトゲンシュタインがヘーゲルの論理を《反復した》としよう。その場合でもウイトゲンシュタインには《オリジナリティ》がないと言えるだろうか。《たんに他人の思想を反復した》と書けば、ヘーゲルの論理の《反復》がいとも安易なことであるかに聞こえる。だが難解で知られるヘーゲルである。それを正確に理解するだけでもすでにして大変なことであるが、これは『大論理学』を真剣に読んだ者にしか分かるまい。その難解な論理を会得した上で、次にはその論理の妥当する事象を記述するのである、例えば「当の場合であること」の「思想」への進展として。自分にその能力のないことを私は正直に認める。だから「書評」の書き振りには違和感を覚える。自らにその力量があるなら別の話だが——その浅薄な論理観からはとてもそうは思えないけれども——、そうでないなら安易であるかの物言いは止めたがよい。

(7) 野村曰く、《著者は、複数の思想家のあいだの「思想的繋がり」(7頁), 「思想的連関」(293頁), 「論理に基づいての深い結びつき」(295頁)等に言及しているが、本書の方法論でそれをあきらかにするのは至難であろう。というのも、そのためにはそれぞれの思想の姿をまずは同定せねばならず、そのためにはそれぞれの思想が属している文脈のなかでそれを同定するほかはないからである。》

これを一体何と呼ぶべきか。始元を理解できない野村である、その説く《文脈》は混乱以外ではない。《それぞれの思想の姿をまずは同定せねばならない》と謂う。しかも《それぞれの思想が属している文脈のなかでそれを同定するほかはない》のである。だがすると、傍点を以てことさらに強調する《それぞれの思想が属している文脈》は如何に《同定》されるのか。《それぞれの思想が属している文脈》というからには、《それぞれの思想》が《まずは同定》されての、その属する《文脈》であろう。つまり《文脈》を《同定する》ためには、その《文脈》に属する《思想》が《同定》されねばならず、その《思想》は《それぞれの思想が属している文脈のなかで同定するほかはなく》、その《文脈》は……。いやはや！ 《そのためには……、そのためには……》なる文も如何にも拙いが、それよりも何よりも信じ難いほどの没論理である。これでは《ウイトゲンシュタインのテキスト》に限らず、哲学書の論理を把握できないのも道理である。

かかる没論理の説く《文脈の考慮》である、実は通説とされる《思想的文脈や伝統的文脈》の墨守にすぎない。先入見——「哲学の病」の根源——を離れて真摯にテキストと向き合う、そんな姿勢は端から見られない。そうでないと言うのなら、《ウイトゲンシュタインの思想が属している文脈》の導出される、その如何を示されよ。また、そこにはヘーゲルの思想は属していないのであろうが、ではスピノザはどうか、ライプニッツは、カントは、ラッセルは。それぞれの思想が属しているあるいは属していない

とされる、その何故を示されよ。さすれば《テキストがもともと属していた思想的文脈》なる安直の通用しないことが直ちに明らかになるう。

(8) 野村曰く、《「哲学者はなんらかの思考共同体の住人ではない。まさにこのことが、かれを哲学者とする」(『断片』第455節)。ウィトゲンシュタインのこの矜持をすくなくとも裏切らないような仕方では、われわれは、いうところの「思想的連関」を見出していかねばならない。》

《われわれは、いうところの「思想的連関」を見出していかねばならない》、すると少なくとも《複数の思想家のあいだ》に《「思想的連関」》の存しうることは認めるわけである。だが言うまでもなからうが、かかる《「思想的連関」》は、当の《複数の思想家》のテキストを読んだ者にも把握される。そして上にはソシュールやマルクスを読んだのかを問うた。ここでさらにヘーゲルを読んだのか、と問うておく。例えば『論理哲学論考』の次の一節。

2-02331 あるものが他のものの持たない性質を持つか、それとも総ての性質を共有する複数のものが存在するか、このいずれかである。前者の場合は、当のものを直ちに記述によって他のものから際立たせ、それを指摘することが可能である。しかし後者の場合に、それらのうちの一つを指し示すことは全く不可能である。

何故ならあるものが何によっても際立たされないのなら、私はそれを際立たせることができない。さもなければ当のものはまさしく際立たされていることになるであろうから。Denn, ist das Ding durch nichts hervorgehoben, so kann ich es nicht hervorheben, denn sonst ist es eben hervorgehoben.

原文を付した2パラグラフを如何に邦訳するか、この点いまは措くが、正確な訳が先行諸訳を基準に採れば《きわめて変則的に》なるであろうことは言っておく。ともあれ2-02331が「不可識別者の同一」に関わることは明らかであり、しかもウイトゲンシュタインは「数多性」を以て「可識別」としない。するとライプニッツよりもヘーゲルに近くウイトゲンシュタインは立っている。『大論理学』に次の一節がある。

相互に等しい二つの物は存在しないという命題は表象作用 [日常的な考え方] に対して奇異な感じを与える、ライプニッツがこの命題を提起して・多くの木の葉のなかから二枚の等しい木の葉をみつけだせるかどうかさがしてごらんなさいと貴婦人たちにすすめたという宮廷での逸話[をきいたそ]ののちにも[やはり奇異な感じを与える]。——人びとが宮廷で形而上学にたずさわり、しかも形而上学の諸命題を吟味するのに木の葉を比較するといったこと以外の努力を必要としなかった [とは]、形而上学にとって幸福な時代 [があったものだ]。(以文社版2 p. 65)

だが両テキストの双方を読んだことのない者に、ウイトゲンシュタインとヘーゲルの近さの分かるはずもない。

それが没論理的にすら把握されうるように、《ウイトゲンシュタインのテキストがもともと属していた文脈》は「表象作用 Vor-stellen」において与えられる（《ウイトゲンシュタインのテキスト》を他の思想家のそれと「比較する」）。野村がそれ「以外の努力を必要としない」とは、ヘーゲルのみならず、ウイトゲンシュタインにとっても嘆うべきものである。《文脈》の考慮が《ウイトゲンシュタインの矜持を裏切らないような仕方》であることはありえない。

テキストを読解する力の浅さ（1・4・5・6）、論理を把握する力の弱さ（3・4・5・7）、広く哲学説を渉猟する力の無さ（2・8）。これが「書評」への私の見立てである。その力量を以て《ワイトゲンシュタインのテキスト》を追思惟するのは《至難であろう》。《ワイトゲンシュタインの思索をすくなくとも裏切らないような仕方で、われわれは、いうところの「矜持」を見出していかねばならない》。

（同じ『図書新聞』2012.3.31付に掲載された徳増多加志・鎌倉女子大学教授による小著への書評に対しては、機会を改めて応答する。）